うとした。文字も大きくて見やすく書かれた。

b　視覚的な資料提示の工夫（ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」①より）

ＯＨＰを活用し、全体に拡大して提示するものと、一人一人が手元でじっくり見ることができるもの、２種類の資料を準備した。投影した資料と生徒が手元に持っている資料とが対応していることで、説明がわかりやすくスムーズに進行できた。さらに、最初に投影された画面の上に、キーワードごとのシートを重ねて提示されていたため、説明の理解を段階的に進めることができた。

図４－５－５
ＯＨＰを用いた発表

また、グループで作成した生徒の発表資料にも視覚的な工夫（赤ペンの活用、文字の丁寧さ、図やイラストの活用など）が見られ、その内容を全体で確認できる点でもＯＨＰの活用は効果的なものになった。このように、生徒の活動の中にわかりやすく伝えるための工夫が見られたことも、ＵＤの授業づくりの好影響だと思われる。

c　グループごとの学習活動の工夫（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」⑥より）

グループ学習の中で、話し合いや発表時の役割を決めさせ、思考を広げるきっかけとした。話し合いの中で、生徒それぞれが発言したり記録したりしながら、積極的に活動に参加している姿が見られた。

図４－５－６グループ学習

d　ワークシートと問題プリントの工夫（ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」③より）

教科書と対応したワークシートを準備した。教師の説明や他グループの発表を聞いて書き込む部分と、学習全体を通しての感想、家庭での振り返り学習を、１枚のワークシートにまとめて書けるものになった。ワークシートのレイアウトはシンプルながらも、記入することで学習活動の内容を俯瞰したものになるように工夫されており、授業後の復習にも役立つ形になった。

また、問題プリントの最後に、理解度を４段階で意志表示できる項目を設け、授業中や事後の個別的な指導に活かすことができる形にした。理解度を「わかる」、「だいたいわかる」、「すこしわかる」、「わからない」の４段階に設定したところ、授業後、「だいたいわかる」以上が４０名中２４名という結果が得られた。

なお、問題プリントの設問については、過去の看護師国家試験の問題を、生徒が身近にイメージできるようアレンジしたものを作成した。国家試験の問題だったことが授業の最後に明らかにされたことで、生徒たちは学習内容の重要度を再認識することができた。

e　個別の声がけ・確認（ＵＤの視点Ⅴ「教師の話し方、発問や指示」②より）

机間指導しながら各グループの話し合いの様子を確認し、適切なアドバイスを加えた。また、各グループの発表後は必ずテーマのポイントと発表のよかっ

たところを取り上げて認め、肯定的な表現で話しかけた。

③　ＵＤの視点を取り入れた授業実践の成果

ア　校内研究の進め方について

上記２つの授業実践について参観者ごとにグループ分けをして、ＫＪ法によるワークショップ型事後研を行った。自評５分、付箋紙への個人記入１５分、話し合い２０分と短時間ではあったが、協働性のある活発な事後研究会となった。

授業公開シートにある「ＵＤの視点による手立て」に絞って話し合いを行ったため、共通の視点での協議になった。見出しをつけた構造化も各グループで工夫を凝らし、発表まで充実した内容で行うことができた。

初めての取組みだったが、異なる教科の教員が共通の視点を持った内容の濃い協議を深めることができた。

図４－５－７　協働性のあったワークショップ型事後研究会

イ　生徒に見られた変容

以下、アンケート形式で各教員から記入してもらった記述部分の回答から一部を抜粋した。

＜主体的に学ぶ姿へ＞

・学習して「わかった」という体験を積むことで、更に学習意欲が高まる。自主的に「何をすべきか」を考え行動できるようになってきた。
・授業の流れを板書したものを見て、時間を確認して行動するようになった。
・今の学習が何と関連性があって、何を目的にしているのかということが理解できる生徒が増えた。その理解度が自発的・意欲的に取り組んでいる様子になり、行動にあらわれるようになった。
・生徒の表情に、「授業がわかる」、「質問をしやすい」というような、ある種の満足感が見られるようになった。

＜より具体的に学ぶ姿へ＞

・一つ一つの説明や指示に工夫を加えたことで、生徒からの反応（わかったこと、わからないこと）が以前よりも少し増えたように思う。
・視覚的に訴える教材を使うことで、これまでイメージを捉えづらかった教科でも、生徒からの反応が見られるようになった。
・より生徒に密着した具体例を出すことで、生徒の理解度が増してきているように思う。生徒たちが今何を理解するといいのか、また、理解したことを自分で確認できるようになったと思う。
・教師が指導者として相手にわかりやすく伝えることの重要性を意識することにより、生徒自身も福祉の現場実習などの場で、利用者の方にわかりやすく伝える姿勢を身につけるよう意識するようになった。
・机間指導をできるだけ多く行うことや、グループでの活動を要所に取り入れる